

富士山の標高よもやま話し

～3776(サン・ナナ・ナナ・ロク)100年～

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 大高 康正〉

富士山の標高は約 3,776m

日本一高い山・富士山の標高は、富士山頂の剣ヶ峰^{けんがみね}で計測されています。そこには、昭和 53 年(1978)に「日本最高峰富士山剣ヶ峰 三七七六米」と刻まれた標柱が建てられ、現在もランドマークとなっています。現在の我々は、この 3,776m の数値を日本一高い山・富士山の標高であると認識しています。日本が台湾を統治した明治 28 年(1895)から昭和 20 年(1945)の期間に、明治天皇は 3,925m の玉山^{ぎよくざん}を富士山よりも高い新たな最高峰^{にいたかやま}ということで新高山と名づけましたが、この例外を除いて富士山の標高 3,776m は、日本最高地点として浸透しているのではないのでしょうか。令和 6 年(2024)に国土地理院は、富士山の標高をあらわす基準点の二等三角点を日本の測位衛星「みちびき」などにより衛星測位した結果、標高は 3,775m56 cm としました。ただ、実際の最高地点はこの基準点よりも数十 cm 高い場所(3776m12 cm)になるようです。また、標高は四捨五入してメートルであらわすので、富士山の最高地点も標高も約 3,776m という数値となり、(サン・ナナ・ナナ・ロク)はそのまま変わっていません。

令和 8 年(2026)は富士山の標高が 3,776m とされて 100 年

富士山の標高が測量により 3,776m とされたのは、大正 15 年(1926)のことです。これは大正 12 年の関東大震災の影響があったためです。大正 15 年に復旧測量を行って、現在の場所に基準点^すを据えて 3,776m29 cm と計測しました。

実は、大正 15 年以前は、富士山の標高は 3,778m とされていました。つまり、今年令和 8 年(2026)は、富士山の標高が 3,776m とされて 100 年ということになります。これはあくまでも測量の成果による数値であり、直接富士山の高さが変わったわけではないのですが、現在の我々が当たり前のように「3776(サン・ナナ・ナナ・ロク)」として覚えている富士山の標高の数値は、実はまだ 100 年の歴史しかないことは、ちょっとした驚きです。

関東大震災の影響による富士山の標高の修正

現在の国土地理院の前身となる陸地測量部は明治 21 年(1888)に設置されますが、その前年の明治 20 年(1887)日本陸軍参謀本部測量局時代に、三角測量と平板測量を組み合わせる富士山の測量が行われています。この測量により富士山の標高は 3,778m とされていますが、確かに明治 20 年測量の 2 万分 1「富士山」の測量図を確認しても、剣ヶ峰付近に「3778」という数値が入れられています。



富士山剣ヶ峰といいますと、明治 28 年(1895)に木造6坪の観測所を建設して冬季気象観測を行った野中至・千代子夫妻〔写真1〕が思い浮かびますが、彼の明治 34 年の著作『富士案内』(春陽堂、1901 年刊行)では、富士山は海拔 3,785m と記しています。野中至が記した数値は、これまで知られている江戸時代以降の測量結果の数値と一致する事例を確認できませんので、その根拠ははっきりしません。ただ、彼は明治 13 年(1880)から山頂での気象観測は行っていたようなので、参謀本部による明治 20 年の測量以外のデータを根拠に、彼が導き出した数値であったのかもしれない。



〔写真1〕絵葉書「富士山頂上 剣ヶ峰及野中氏夫妻」(個人蔵)

大正 12 年の関東大震災によって地形の隆起や沈降が起こり、これまでの測量データを復興計画等の測量に使用できなくなりました。そのため再測量の必要が生じます。こうした測量のやり直しを復旧測量と呼んでいます。富士山頂では大正 15 年に復旧測量が行われていますが、基準点となる二等三角点^{はくさんがたけ}が剣ヶ峰と白山岳の2ヶ所に新設されました。この測量により富士山の標高は 3,776m29 cm とされ、さらに三角点を設置した際に記録した「点の記」によると最高地点は 3,776m44 cm と計算されています。

その後さらに、昭和 37 年(1962)に基準点の標石が露出してしまったため低く埋め直した際に標高 3,775m63 cm とされ、平成 26 年(2014)には衛星測位システムの登場によって標高 3,775m51 cm となりました。そして最新の測量成果として、令和 6 年(2024)に標高 3,775m56 cm と修正され、現在に至ります。

【参考文献】

- ・箱岩英一「富士山の高さ」(『地質ニュース』590 号、2003 年)
- ・野中至・野中千代子著、大森久雄編『富士案内 芙蓉日記』(平凡社、2006 年)